

中国人友人同士の食事場面における「遊び」としての対立

儲叶(葉)明 (筑波大学大学院)

1. はじめに

本研究の目的は相互行為における「冗談」、特に『遊び』としての対立(大津 2004:45)を中心に、それが相互行為の中でどのように実現されているのか、その実態の一端を解明することである。

相互行為における「遊び」としての対立に関わる研究は、これまで様々な分析・記述がなされてきた(大津 2004, 2007, 高梨 2016, ウォンサミン 2018)。その手掛かりとして、笑い、発話の繰り返し、韻律の操作、感動詞の使用、スタイル・スイッチング(大津 2004, 2007)などが指摘されているが、記述が十分とは言えない。例えば、張(2016)で、韓国語母語話者同士は相互行為においてコンテキスト化の合図(Gumperz 1982)なしに「冗談」のやりとりが達成できると指摘されているように、様々な言語、文化において存在する「冗談」や「遊び」としての対立について、その様態や方法は必ずしも一致するものではない。このような「遊び」としての対立の方法を理解し合うことは、異文化接触における衝突、不愉快、軋轢を避けることの一助となり得る。しかし、これまでの相互行為における「遊び」としての対立に関する研究は、英語、日本語を対象としたものが多く、中国語母語話者の相互行為に基づいた考察が十分に論じられているとは言い難い。そこで、本研究では、中国人の友人同士の食事場面における自然会話を分析し、「遊び」としての対立を相互行為の中で実現する方法に関して、その実態の一端を明らかにする。

2. 先行研究

「遊び」としての対立に言及した先行研究には、女性同士の自然会話を音声で分析し、「遊び」としての対立がどのような手続きによって実現されているかを分析するもの(大津 2004, 2007)、同じく日本人女性同士の会話を用いて間主観的な個性の構築に注目して分析したもの(高梨 2016)、ロールプレイを用いてタイ人の不満表明のフレーミングシフトを実証したもの(ウォンサミン 2018)、そして先述の張(2016)がある。これらの研究の共通点として、参与者の笑いを、相互行為における冗談認識の標識としていることがある。しかし、笑いを伴わない「遊び」としての対立も日常生活には存在する。確かに、そのようなやりとりは一見冗談と解釈しにくいものであるが、本研究では、「遊び」としての対立と本当の対立の境界線を跨ぐような事例を呈示し、その解釈に挑戦する。なお、私たちの日常生活に生じる相互行為は、同性同士だけではなく、異性を含めた、また、多人数によるものも多い。加えて、実際のコミュニケーションでは、音声的な要素だけではなく、表情やジェスチャーなど非言語的な要素もみられ、相互行為の理解には必要不可欠である。これらを踏まえ、本研究では、中国人の異性を含む多人数の食卓場面における自然会話を映像に基づいて分析する。

3. 研究方法

キャラクタや人の個性は「指示的に言及する」(高梨 2016: 105)ことが難しく、メタ的に伝達されることが多い(定延 2011, 高梨 2016)。この点に関しては「遊び」としての対立も同様である。これから対立することを宣言しても(むしろ、したからこそ)「対立」とは見なされず、さっきのは冗談だと説明すればかえって疑われてしまう可能性がある。したがって、「遊び」としての対立を考察するには、相互行為に見られる言語、パラ言語、非言語的な要素を緻密に記述すること、また、相互行為によって指標されるものを分析することは不可欠であり、刻々と変容する相互行為の分析が適切と考える。そこで、本研究は約120分の中国人友人4人の食卓における自然会話をを用いて、その中に出現した「遊び」としての対立の現象を分析していく。

4. 考察

4.1 「理不尽な不満の放任・参与」

断片①では、大阪にあるfのアパートへ友人w, y, hの3人が火鍋を食べに集まっていた。4人は同じ大学出身で親友といえる関係にある。fの部屋には、人数分のコップがなく、やむをえずコーヒ用のコップも使うことになった。しかしそのコップは小さく、誰も使いたがらなかったため、誰がどのコップを使うかはくじを引いて決めた。その結果、yが、その小さいコップを使うことになった。この断片の直前で、wはみんなに飲み物はどうかと聞いた後、全員に順番に飲み物を注いでいる。

4人の位置関係は図1の通りである。



図1 w, f, y, hの位置関係

コップへの評価			
女性陣	対	男性陣	
w, y		f, h	
—		+	

図2 「コップ」の評価(-/+)と女性/男性陣

この断片では、小さいコップを使うことになったyが、そのコップは価値のないものと主張し(1, 9, 11行目)、コップ所有者であるfが、それに反論する(3, 8, 13行目)。wは途中でyの肩を持ち(10行目)、hはfの肩を持つ(7, 12行目)。なお、図2に示した通り、この断片では男性陣と女性陣が分かれて、「コップの価値」を巡る「対立のフレーム」を構築している。その根拠は、yが提起した「コップ」(1行目)というキーワードを巡って、男性陣のfとhが3, 7, 8行目で共同で「コップ」に関する情報を添えていることと、9, 10, 11行目のyとwの順番交替にある。fとhの3, 7, 8行目の手続きに類似のものとしては、「指示対象の範囲の狭窄化(narrowing a reference, 筆者訳)」(乐2018:128)という手続きが報告されている。断片①の場合、yはそもそも「コップ」に関する詳しい情報を求めているため、yの1行目の内容に対する反発として、fとhが共同でこの手続きを進めていると考えられる。また、3行目のfの発話は、「ペルー」の部分が強くと発音されており、同時に首を傾げてyに笑顔を見せながら産出されていることから、自慢話のように発話を構築するスタンスが見て取れる。一方、8行目のfの発話の後、女性陣のwとyは、9~11行目で、「有何用(だからなーに)」(9行目)、「然后呢(それから)」(10行目)、「就被所有人嫌弃(みんながいやがる)」(11行目)と反発を立て続けに産出し、結束を示している。9行目でyは、fの「城市杯(シティーマグだよ)」(8行目)という説明を受けた後、発話の前に、息を吐く音を産出した。ここでの息を吐く音は、8行目の発話から間髪入れず、短く産出されており、冗談を志向するというよりも、fの8行目の主張に対して軽蔑のスタンスを表出することが見て取れる。実際にその後、「有何用(だからなーに)」(9行目)、「就被所有人嫌弃(みんながいやがる)」(11行目)のように、対立を志向する発話が続いた。しかし、これらの発話が産出されたときに、いずれも明らかな笑いが伴っていたことから、冗談フレームを志向するスタンスが見て取れる。それに対して13行目でfは、先行のhの発話(12行目)を先取りする形でyに対する反発を示した。しかし、13行目のfの発話は、笑い、韻律の操作を伴っていることに加えて、速く発話されていることから、fが先行文脈にあるyの一連の行為を深刻なものとしてではなく、冗談として捉えているというスタンスが見て取れる。

以上の記述を通して、この断片では女性陣(y, w)と男性陣(f, h)がそれぞれ結束し、対立のフレームを構築していることが示唆される。しかし、冒頭で触れたように、yは「コップ」がコーヒー用のものであるという情報を既に知っており、また、そのコップをyが使用することも、「くじを引く」という平等なプロセスを経た結果である。それでも、yが1行目のように文句をこぼしたことは、通常、「理不尽な不満」と理解され、本来ならば、fが「コーヒー用のものだから」のように事実へ言及することによって、yの文句に対して素早く反発することもできる。しかし、1行目の直後、3行目でfが産出したのは、yの発した理不尽さを真正面から指摘するものではなく、笑顔と韻律の操作を伴った「自慢話」であった。このことから、yの理不尽な不満に対するfの放任が見られ、さらにhもそれに参与するスタンスが見て取れる。そのまま放任した「遊び」としての対立のフレームは、11行目のyの発話をきっかけにして、13行目でfが「コーヒー用のコップだから」と事実を持ち出すことで収束する。紙幅の関係で断片①には示していないが、13行目以降、yは文句を止め、会話はwによってほかの話題に移行した。断片①からは、fがyの理不尽な不満に対する放任・参与、yは理不尽な文句を始めることによって、「遊び」としての対立を構築する手続きが見られた。この断片①は、f, yから笑いや韻律の操作など(3, 9, 11, 13行目)、明確なコンテキスト化の合図が見られる事例である。次に、コンテキスト化の合図が少ない事例を示す。

断片①【コップ】

- 01 y: (将杯子递给w)一口的量 真(h)是(h) 酸(h)了(h)下次来你们家吃我还得自备(打嗝)自备个杯子。
(コップをwに渡し) 一口のコップ(h) 参っ(h)た(h)な(h)今度来るときはコップまで自分で用意(しゃっくり)用意しなきゃ
- 02 h: 你下次() 今度来るときは()
- 03 f: (边接饮料边微笑朝y看)我这个还是从秘魯回来的(好不好)
(飲み物を注いでもらいながら笑顔でyに向かつて)おい、こう見えてこれはペルーから持って来たんだよ
- 04 h: [啊哈
hhhhh 天哪::: hhhh
(hhhhh アハオーマイゴド hhhh)]
- 05 y: 看到写了
(指着杯子上的文字)
見たよ
(コップの文字に指差して)
- 06 w: 秘魯=ペルー=
- 07 h: =而且还是秘魯的星巴克
=しかもペルーのスタバだよ
- 08 f: 对啊 城市杯(微笑)=
そう シティーマグだよ(微笑み)
(y看杯子上的文字)
- 09 y: =hh(1.4) ¥有何用¥
(停止往嘴里送的筷子朝f)
=hh¥だからな::に¥
(食べるのを一旦やめてfに向かつて)
- 10 w: (转身放饮料)然后呢(0.75)
だから(code switching)
(後ろに向き飲み物を戻す)それからだから
- 11 y: 就被(h)所(h)有(h)人(h)嫌(h)弃
み(h)ん(h)な(h)が(h)嫌(h)が(h)る
- 12 h: 因为它是=だからそれは=
- 13 f: ¥>=因为它是喝咖啡:::的<¥
¥>=コーヒー用のコップだから<¥

4.2 「対立」と「冗談」の境界線を跨ぐ

断片②(a) (b)では、y と f の位置が断片①から変わっている(図3)。2つの断片は、共に断片②(a) 1行目で、h が y に対して産出した評価(食べる量が多い)を巡るものである。この断片の前で、満腹になった h が立ちあがり、少し休憩してから食べると告げた。その後、鍋に次から次へと食材を入れる y を見ながら、断片②(a)の会話に差しかかる。1行目の h の評価に対して、y と w は2, 4, 6行目で h に対する一連の非難を産出した。注目すべきは、y と w の、これらの非難の産出に伴う冗談を志向するパラ言語、非言語的な要素の少なさである。y は2行目で、鍋にレタスを入れている手を鍋の上に浮かせたまま、一瞬 h を睨み、小さい声かつ速いスピードで「黙れ」を産出した後、3行目でレタスを鍋に入れる作業を再開した(図3)。その後、h の説明を待たずに4行目で w は非難と考えられる疑問文を産出した(林 2015)。しかし、これに対して、h は明らかに声が出るような形で笑いを産出した(5行目、図4)。この笑いは2秒ほど続き、口を開けて声を出すような形だった。その後、6行目で y が笑いを伴わずに、もう一度「黙れ」を産出したにもかかわらず、h は7行目で「y なら平気」と断言した。この h の5, 7行目の反応から、y と w の発話にはパラ言語、非言語的な要素に冗談を志向するコンテクスト化の合図が少なかつたにもかかわらず、自分に対する一連の非難を h が深刻に捉えていないスタンスが見て取れる。

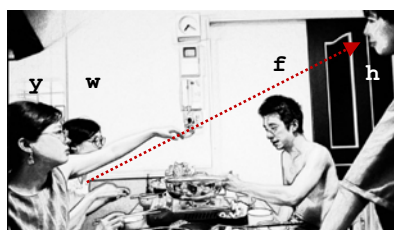


図3 鍋の上に手を浮かせる y



図4 笑いを産出する h

次の断片②(b)では、h のこのような応答に対して、w と y の非難がエスカレートしている。断片②(b)は(a)の続きである。ここでも、y と w は h への非難を産出している(11, 12, 15行目)が、y は視線を h に向けることはなく、表情も乏しい(図5)。対して、w は韻律の操作や笑顔などのコンテクスト化の合図を産出し、冗談を志向した(12行目、図5)。13行目と14行目でいきなり「野菜の食べ方」に関する話題にシフトし、15行目からは、再び w による「遊びとしての対立」が h に向けて開始された。ここで「遊びとしての対立」と解釈した理由として、15行目で w がドラマの中のセリフ(注釈 i)を使用し、また、手を顎に当てて笑顔を見せるなどの手続きを踏まえたこと(図6)、16行目の修復によって w の真意を理解した後、18行目で h が笑いを産出したことが挙げられる(図7)。



図5 笑顔がない y と笑顔の w



図6 笑顔で頬つべたに手を当てる w



図7 笑いを産出する w と h

断片②(a) 【食べる量が多い(a)】

- 01→ h: y (y の姓名) 我觉得 y 食量很大(认真表情微笑) (.) 其实(.) 真的很大(小声)
y (y の名前) は食べる量がとても多いと思う(真剣そうな表情で微笑みながら) (.) 実は(.) 本当に(.) 多い(小さい声)
- 02→ y: (手懸停在鍋上, 朝 h 瞪)>闭嘴<(小声)=
(レタスを入れる手を鍋の上に浮かせながら, h を睨む)
>黙れ<(小さい声で)
- 03 h: =因为从之前我们做那个=
(y 重新开始往锅里放菜)
=前あれをやった時=
(y がレタスを鍋に入れる動きを再開)
- 04→ w: =你这样说一个女生你觉得真的很好嘛?
=女の子に対してこういう評価をするって本当にいいと思う?
- 05 h: hhhhhhhhh.
- 06→ y: 闭嘴(边往锅里放菜边说)
黙れ(鍋にレタスを入れながら)
- 07 h: 没事 y (y の姓名) 可以说 hhhhh
(朝 y 看)
大丈夫 y (y の名前) なら平気 hhhhhh
(y を見る)

断片②(b) 【食べる量が多い(b)】

- 08 w: 什(h) 么(h) 叫(h) y (y の姓名) 可(h) 以(h) 说(脸朝 h 方向, 朝下看) y (h) 不(h) 可(h) 以(h) 说(h) 啊(朝向 y 耳边)
y (y の名前) な(h) ら(h) 平(h) 気(h) っ(て) (h) な(h) あ(h) に(h)
y (h) こ(h) そ(h) 言(h) え(h) な(h) い だよな(h) (y の耳元に向かって)
- 09 y: 小心我把=
その口を=
- 10 h: =¥y (y の姓名) 不让我说¥
=¥y は俺に言わない¥
- 11→ y: =小心我把你嘴唇上(1.5) 図4
=その口を縫い付けるぞ
- 12→ w: 聊会儿你的嘴(张嘴笑着看 h) (1.0) 図4
その口を千切ってぐったぐったに
してやるぞ
(口を開け笑いながら h を見る)
- 13 y: 这个(野菜を指す) (.) 就涮一下吃这个
可好吃可好吃了
それ(野菜を指す) (.) ちよっとしゃぶしゃぶしているだけでめっちゃくちゃうまい
- 14 w: 是是是:::
そうそうそう:::
- 15 w: 今年御花园の枫叶好像不够红啊
(手托腮笑着看 h) 図5
今年御苑の紅葉はあまり赤に染ま
ていないな!
- 16 h: 什么花 方圆啊?
(理解できず音声をまねし確認している)
- 17 w: 赏 h (h の綽名) 「一丈紅」
h (h の綽名) に「一丈紅」を賜る
- 18 h: 哦 hhhh 一丈紅
なるほど hhh, 「一丈紅」ね 図6

断片②(a) (b)の一連のやりとりは、特にyの目線、笑顔、韻律の操作の少なさから、「冗談」として解釈する絶対的な根拠はないように思われる。要するに断片②は「冗談」と「対立」の境界にあるような事例と言える。しかし、以下に示す理由から、筆者はこの2つの事例を「遊び」としての対立と位置づけたい。

▲断片②(a)のhの笑いや弁解の反応から、少なくとも7行目までは真剣にとらえていないことは会話の中でも裏付けられる。▲断片②で、fは積極的に相互行為には参与していないが、表情に緊張感はなく、微笑みながら、y、h、wのやりとりを見守るような姿がみられた。▲y、h、w、fを知らない中国人4人と日本人3人に断片会話の動画を見せたところ、中国人の多く(3人)は冗談と捉えた。しかし、例えば「その口を縫い付けるぞ」(11行目)のような発話については、女性から男性に対するものである場合にのみ冗談として許容されるという意見があった。この点は筆者の判断と合致していた。つまり、中国語母語話者の「遊び」としての対立にはジェンダー性が関与する可能性がある。一方、日本人は全員、本当の対立と判断した。▲断片②(b)後のyとhの相互行為から導くことができる。この断片の40秒後では、yとhが大きな笑いを産出し、さらにその1分後、yとhが通常通りに言葉を交わしていた。▲最後に、後日動画をyに見せて確認すると、「仲が良いから怒るわけがないだろう」、「もともと大食いなんだから」と答えた。

5. 結果

考察の結果、中国人の「遊びとしての対立」は、従来の研究(大津2004, 2007)で指摘された笑い、韻律の操作などのコンテキスト化の合図だけでは説明できない一面を持つことが明らかとなった。そこで、以上の事例に基づきながら、中国語母語話者の「冗談」を行う際の手続きに関する解釈を示す。

- ① 理不尽なことを言って遊びのフレームを開始し、その理不尽なことを他の参加者が一時的に放任・参与する遊びとしての対立フレームのやり取りが見られた。
- ② 断片②(b)の13, 14行目からはフレームの切り替えの速さがうかがえる。中国語母語話者の談話の切り替え手続きが短いことは楊(2007, 2011)でも報告されているが、遊びのフレームとほかのフレームの切り替えにおいても、同じく、手短な手続き、または手続きを踏まなくてもよいことが示唆された。
- ③ 遊びのフレーム構築の手法として、笑い、韻律の操作などこれまで報告された方法だけではなく、ドラマのセリフの引用、誇張された表現の使用によって逸脱を強める方法が見られた。

また、コンテキスト化の合図が極めて消極的で、「冗談」と「対立」の境界線を跨ぐようなやりとりも見られた。このような事例の解釈として、筆者及びほかの3名の中国語母語話者の主観に基づき、ジェンダー性に依拠したやりとりの可能性と、中国語母語話者同士の冗談フレームの構築には、お互いの関係性についての間主観的認識が重要であるということをも提案する。なお、これらの解釈の検証は今後の課題とする。本研究全体の結果として、多人数の中国語母語話者の友人同士の相互行為における遊びとしての「対立」は、いくつかのコンテキスト化の合図だけを拠り所に説明することが困難な一面を持つことが示唆された。

ⁱ 15~18行目のwとhのやりとり(16行目のhの修復以外)は、中国の人気ドラマ「甄嬛傳」(日本語訳:宮廷の静い女)のセリフに基づいたものである。

「一丈紅」はドラマにあった架空の刑罰の名前であり、「処刑された人の血は紅葉を赤く染める」ことから由来するとドラマの中で説明されている。(ゆえに15行目の発話がある)。しかし、15行目のようなドラマのセリフを使用した冗談フレームの開始はあまりにも突然だったため16行目のhによる修復が始まった。このことから、中国語母語話者のフレームの切り替え手続きが短いことが裏付けられる。

主要参考文献

- 林始恩(2015)「親和の関係における否定的評価の研究:日韓母語話者の言語行動の比較」筑波大学人文学社会科学研究所 博士學位論文
- ウォンサミン(2018)「日本語会話におけるタイ母語話者の不満表明の言語行動:不満表明フレームから遊びフレームへのリフレーミングに着目して」、『社会言語科学』21(1), 239-254.
- 大津友美(2004)「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス:「遊び」としての対立行動に注目して」、『社会言語科学』, 6(2), 44-53.
- 大津友美(2007)「会話における冗談のコミュニケーション特徴—スタイルシフトによる冗談の場合」、『社会言語科学』10(1), 45-55
- 片岡邦好・池田佳子・秦かおり(2017)『コミュニケーションを枠づける:参与・関与の不均衡と多様性』くろしお出版
- Gumperz, J. J. (1982) *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高梨博子(2016)「遊びのフレームにおける間主観的個性の形成に関する考察:スタンステーキングの視点から」、『社会言語科学』, 第19巻1号, 103-117
- 張允娥(2016)『友人同士の自由会話におけるポライトネス・ストラテジー:同性間の会話からみる日韓差とジェンダー』, 大阪大学大学院 博士論文
- Bateson, G. (1972). "A theory of Play and Fantasy". In Bateson, G. *Steps to an ecology of mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 楽耀(2018)「汉语会话交际中的指称调节」, 方梅・曹秀玲編『互动语言学与汉语研究』北京社会科学文献出版社
- 楊虹(2007)「中日母語話者の話題轉換の比較—話題終了のプロセスに着目して」、『世界の日本語教育』17, 37-52
- 楊虹(2011)「中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較」、『立命館大学言語文化研究』22(3), 185-200